

## 第17回兵庫県子ども・子育て会議議事概要

日時：平成30年3月9日

場所：兵庫県不動産会館

### ○委員

ふるさとづくり青年隊は、地域の課題を解決するために地元と地元以外の青年が共同し、輪になって取り組んでいる。また、若者の出会い・結婚の場にもなり、ふるさとづくりという観点からも成果を上げている。

自然学校は、新たなプログラム作成も重要だが、十分な効果を発揮するためには、それを読み取って、しっかり実行できる人材が必要。同時に教員の質も高める取り組みもして欲しい。また、冒険体験もいいが、子ども達は、便利なあまり日常生活における体験も非常にしにくくなっている。そういうことを含めて体験活動の在り方についても考えて欲しい。

ふるさと魅力発見副読本は、本をつくるだけでなく、生かし方を提示していかなければ、なかなか身につかないので、工夫して欲しい。

### ○委員

医療的ケア児に対する支援体制の構築について、医療的ケア児に対して訪問看護が結びついていない。訪問看護は、主治医の小児科の先生の診療に基づいて行うが、地域の小児科医で主治医のなり手がいないという部分がある。

### ○委員

昔はこどもの館で、様々な調査・研究をしており、それが大変参考になった。しかし今では、それらの調査・研究、モデル事業を実施しているところが少なくなってきた。こどもの館30周年を契機にその部分にも力を入れて欲しい。

### ○委員

スクールカウンセラーは、小・中学校の中で、学校全体に広くかかわり、学校の問題により深く入っていくことが期待されている。しかし、週1回1日6時間という形態ではなかなか学校のネットワークの中にしっかり入るのは難しい。常勤化してネットワークの中に組み込まれるというのが本来の姿。

## ○委員

発達障害の子ども達に対して、教師は、生徒指導で対応するなど生徒とうまく理解しあえていない。尼崎では精神科の先生を直接学校に派遣し、先生への研修や、子どもを診てアドバイスをして貰っている。実際に、専門家に診てもらい、アドバイスを貰えるのは、現場の先生にはすごくありがたい。そのようなシステムを検討して欲しい。

行政間や、子育て支援サービス、まちの子育てひろば同士がしっかりつながってなくて、どこにいけばどのようにつながれるかを行政で体制や窓口を整えて、しっかりコーディネートして欲しい。

## ○委員

医療的ケア児の中には、病院と施設を行き来することもある。そのような場合、施設の職員の医療知識を向上させ、コーディネート機能を高めれば、福祉と医療の連携ができる。これからは、病院だけでなく施設からも医療ケアの子どもたちをサポートできる体制を整え、連携を進めて欲しい。

## ○委員

1歳半健診や3歳児健診を受けない子どもや、指導されても受診しない保護者が認定こども園や幼稚園に入ってくる。また、3歳児健診でひっかかってもその情報が小学校就学前健診に行かないケースもあり、問題発見が遅くなっている。検診機関と幼稚園、保育所、小学校で円滑な情報共有をして欲しい。また、5歳児健診を全市町で実施して欲しい。

## ○委員

発達障害の子どもの率が高くなっていると思う。これは、発達障害だけでなく、二次障害・親のかかわりの悪さによって症状が悪化している側面もある。

県立こども発達支援センターにつながうと思っても、初診に3、4カ月待ち、次回4か月待ちで、早期発見、早期療育につながらない。

現状の発達支援センターの体制では、余りにも数が多過ぎて、回っていない。幼児教育や学校教育にも大きな影響があるので、センターの機能を強化させて欲しい。特に、各市町で言葉の遅い子たちに、言語聴覚士さんによる早期対応ができるよう

機能の充実もして欲しい。

### ○委員

保育人材確保対策について、現在、市町間の競争が激化し、特定の市が高額な準備金や貸与、補償金のようなものを保育士に出し、行政が囲い込みを行っている。

こうなると、お金のある特定の市町に人材が流出し、保育施設が開所できず、待機児童が解消できない市町が出てくる。さらに、子育て世帯が、待機児童のいない市町に移動する社会現象が起こるのではないかと危惧する。この実態を改善して欲しい。

### ○委員

最近、政府も、自治体も、企業も女性が輝く社会にというキャッチフレーズのもと、母親が子育て、介護、仕事に大変疲れている。これ以上どう頑張れ、どう輝けばいいのかという追い詰められた状況になっている。

ワーク・ライフ・バランスは、女性だけの問題ではなく、企業内の体制の変化や意識改革が重要になる。やはり、男性の問題であるという視点を持って施策づくりに生かして欲しい。

### ○委員

放課後児童クラブで、新たに平日の19時半までになったが、一方子どもの成長から言うと、夜の7時半までクラブにいていいのか疑問。働き方を変えないといけないのではないか。

### ○委員

2人目の出産は多いが、3人目の出産は大きく落ちる。実際、3人目の妊娠中の相談も多く、温かく背中を押してあげれば、お母さんも元気に頑張れるので、相談窓口でも背中を押して欲しい。

また、電話相談をしてきた妊婦さんに、保健師、ソーシャルワーカー、県の相談窓口には連絡したか訪ねると、窓口を知らない方が多い。専門機関、病院、保健師、としっかり連携をとって欲しい。

## ○委員

県民にこの相談の場合、どういう相談場所や窓口があるのか、県民がわかりやすい体制にして、わかりやすくPRして欲しい。

## ○委員

子育てでつらくなると、殆どの方は、相談には行かず、自分を責めて、自分を追い込んでしまい、追い詰められてはじめて、何かのきっかけでようやく言えることが多い。このため、早期に窓口等を伝えておくことが重要。1歳半健診であれば、3歳児健診、5歳健診とつなげ、個人として継続的な切れ目のない支援を実現しなければならない。

## ○委員

発達障害の問題が数も増え、幅も広がっている。学校、幼稚園、保育所でも発達障害を、障害ではなく、子どもの特徴として理解できないと子どもに対応できず、次の段階で深刻になって現れる。

発達障害にかかる認識がまだ十分ではないので、先生は、研修等に行くまでに、心理士や医師、長く経験のある方等の話を聞いて、発達障害を理解し、現場現場でしっかり経験を個々で積み重ねることが重要。

## ○委員

保育人材は、勤務を維持して長く勤めて貰えれば問題がないが、保育士は確保しても短期間で辞めていくことが多い。保育所・幼稚園の施設のあり方や処遇の問題は引き続き課題として持たなければならない。

## ○委員

保育人材の回転が早いので、運営者も人材確保が大変で、常に神経を使うし、子どもに継続的なケアができない。質の低下にもつながるので、長く勤められる環境の整備に向けて取り組んで欲しい。